

何かがやってくる

カルテに「眩暈」と書くつもりだったのに「眩」と書いたあと指が動かず、妙に時間がかかって変だなと思いながら書いたものをよく見ると「眩曇」となっている。しかも、いけないことに、見直してどうも引つかかるものがあるのに

「なんか変だけれど、マ、いいか」

とそのまま次に廻してしまつて、目ざとい看護師の高橋君に注意されてしまった。

漢字が思い出せない時、とりあえず似たような字を書いて見ることはよくあるけれど、違っているなと思いつながらそのままにすることは通常、ないことである。それを今日、やつてしまった。

以前は、そんなことはなかった。

正月にフルートの練習に行つて三週間ぶりに音階を吹いて、ドレミファと順に上がるのは出来るが、ドレファとミを跳ばして吹こうとすると、環指と小指が纏れて吹けない。本

来なら簡単な指の運びで無意識に出来て当たり前なのに、それが出来ない。指が忘れていくというより頭が忘れていく。何度も躓きながら動かしているうちに回復はしたけれど、この指使いは初歩も初歩、三週間吹かなかつたから忘れるほど難しい指使いではないのに・・・。

以前は、勿論そんなことはなかった。

近年物忘れが嵩じて、特に固有名詞が直ぐには浮かんで来なくて口ごもることが多くなっているが、この年になれば誰だってそうだよと、あまり気に留めていなかった。

実際「前期」だけれど立派な「高齢者」としては、そんなことを気に留めたところで仕様が無いし、周囲のフォローで実害も無かったような気がする。

それが最近は一とひねり様子が変わって、単に言葉の問題だけではなく、また他人に説明出来ることではなくて、自分で「あれ、これは・・・」と思うことがある。「あれ」のあと、さざ波の立ったような気持ちを言葉にすれば、

「あ、いよいよ何かやって来そうだな・・・」

という漠然とした不安である。

老後は誰もが云うようにピンピンコロリという経過が一番望ましいけれど、それが実現出来るかどうか……。正直に言って死ぬことは別に怖くはないが、そこまでの道中が、ピンピンでないとするとちよつと、困る。

自分も困るし、なにより看てくれる家族を困らせる。

昨年が古稀だったから、いくら永く見積もっても自分の余命はあと十五年というところだろうが、その十五年の間に発生する困った事態とは何だろうか。自分の既往歴、家族歴から想定すれば、まずやって来そうなのは心筋梗塞、直腸癌の再発というあたりであろうが、冠状動脈三本にそれぞれ入れて貰った計六本のステントは有効に働いてくれているようだし、切除の際リンパ装置にこぼれ落ちて、残ったかもしれない直腸の癌細胞も手術後は、死に絶えたのかどうか、少なくとも増殖しないでいるらしい。

典型的な日本人の一人としては、心臓、癌と来ると三大死因のもう一つ脳卒中を想定せざるを得ないが、高血圧、心房

細動が昔からある私には、脳血管障害のリスクも高い。

現に、「あ……」と気になる小異変の、殆どは脳がらみであって、大袈裟に言えば、一過性脳虚血発作か認知障害ともいふべき症状である。これらは案外、まさに認知症の最初の兆候であって、いずれはホンモノの認知症が歴然として来て、結局末路は肺炎という経過を取るのかも知れない。

しかし本人は、勿論そうとは思っていない。

この冬インフルエンザが大流行したが、恐れられていた、いわゆる「パンデミック」には至らなかった。

最初の「パンデミック」とされる「スペイン風邪」では、一九一八年春から一九年秋にかけて世界で六億人が罹患、約五千万人が死んだという。当時の日本の人口が五千五百万人だったというから日本人がほぼ消滅したに等しい。

日本の死者は三十九万人、史上、過去いかなる天変地異でも戦争でも、一度にこれほどの死者を出したことは無い。

九十年前よりウイルスの伝播は遥かに速いから、地球のど

こか、多分東南アジアあたりを起源にした新型の鳥ウイルスが人間にも感染するようになれば、直ぐに私の医院にもやって来るだろうが、私はそれを鑑別診断することは出来ないし、治療の為の有効なテは何もない。

この冬、ノロウイルスによると胃腸炎の患者を二日に一人くらいの割合で診た。患者の数のいたって少ない私の医院としては大流行であった。

私自身開業して間もないころ、深夜に猛烈な悪心嘔吐で発症して、治るのに二日かかった経験がある。だから二度とノロにはかからない自信があったが、はたしてこの「大流行」のさなかなのに、何事も無かった。

しかし今度の新型鳥ウイルスにたいしては、これでは済まないだろう、マスクひとつで防ぎきれぬ相手ではなさそうである。ノロならいくら猛烈に吐いても下痢しても、「真武湯」を飲んで三日も静かにしていれば治ってしまうけれど、今度ばかりはそうはいかないかもしれない。

一個人として生き延びるためには、そしてまた小さな医院を存続させるためには、よほどの幸運が重なってくれなければなるまいが、その幸運が私には残っているのだろうか。

（ 神庫 二〇〇八年三月 ）

（注） 二〇一五年正月、私は脳梗塞を患った。直前に何か前兆を示す異変を感じなかったのかとよく聞かれる。

直前ではなくて、殆ど忘れていたけれど、『続 遠ざかる日々』の再録のために「何かがやって来る」を再読して見て、数年前から、自分にはいずれ何かが起こることを感じていたのだと思った。何かを回避することは出来なかったけれど。

つまらないことではあっても記録していてよかった。

それでも、自分の生きていた軌跡……である。